



# 青春の 迷い道



川崎ゆきお

時代が次々と移り変わり、新しく新しくなっていく。岸和田老人は昔の暮らしに固執しているわけではない。また、新しいもの、古いものという感覚もあまり抱いていない。ぼんやりと人生を過ごしてきたつもりはないが、これは本人がそう思っているだけなので、保証はない。

よくあるように、そこに青年が現れ、会話になる。

その青年は何処から現れたのかは分からない。気が付けば二人は岸和田老人宅の縁側でお茶を飲んでいた。桜の花が咲き、もう暖かい時期だ。

「そうだねえ、年を取ると、新しいものが苦手になるねえ。親しみの問題だろうよ」

「それは僕も同じです」

「まあ、君の場合の方が深刻じゃないのかね。避けて通れないこともあるだろう。私も勤めていた時代、パソコンが社に導入された。まあ、計算機のようなものだがね。これで伝票などを書けという。私は逃げたがね。しかし逃げ切れなかった。先代社長が会長になり、会社を任された息子がそういう改革というか、改新がしたかったんだろうねえ」

「それで、逃げ切れなかったわけですね」

「まあ、逆らえば首だろうよ。だって、仕事が出来ないのだからね。それを使わないと。そのパソコンはねえ、社内のパソコンとも繋がっているんだ。これはかなりお金が掛かっているよ。しかし、難儀な仕掛けにしたため、みんな困ったよ。若い人はいいけどね。私なんて、キーボードが先ず打てない。まあ、計算が多いからねえ、電卓だと思って使っていたよ」

「それは大変でしたねえ」

「君なんて、もっと大変だろ。目まぐるしく新しいものが出て来るから」

「ああ、まあ、適当ですよ。本気で覚えるときりがありませんから」

「多いと、薄くなるのかね」

「はい、だから、新しいものが来ても、もうそれほど驚きませんよ」

「それは、私も同感だね。その後も色々新しいものが来たよ。うちは設計事務所なだけだね。私は事務だから、設計はしないけど、ソフトで図面を書くんだ」

「キャドですね」

「そうそう。あれでかなり振るい落とされたよ」

「はあ」

「お祓いのようなものさ。あれで、ベテランが多く辞めていった。まあ、独立したんだけどね。使えなかったんだよ。そのソフトを」

「でも設計士さん達でしょ」

「図面はベテランでも操作は素人だ」

「そうですねえ」

「図面を開くまでが大きな壁でねえ。開けてしまえば、若い者には負けんだろうが。それを考えると私は図面屋じゃなくてよかったよ」

「そうでしたか」

「古い時代に戻ろうとは思わんのは、戻れないからだろうねえ。時代は後戻りしないからねえ。私もそうだよ。だから、戻れないのなら、それは最初からないように考える。不可能なものだから」

らね」

「今はどうですか」

「今とは」

「最近の新しい事柄なんかはどうですか」

「いいのもあるよ。便利になってねえ。まあ、何でもかんでも早く出来るようになったので、それはそれでいい。ただ、昔のように何もしない待ち時間というのが減ったねえ。まあ医者のお待ちは別にしてね」

「そうですか」

「ところで」

「はい」

「君は何だ？」

「あ、はい」

「どうして私の家の庭に入り込んだ。お茶まで飲んでおるぞ」

「岸和田さんが入れてくれたのですよ」

「そうか。しかし、君は誰だ、そこにいるから知り合いかと思ったが、見たことのない顔だ。今改めて気付いた」

「ああ、私は話し相手ですよ」

「そうか、そんなボランティアが来ておったのか」

「はい。今日は僕です」

「若いのに暇なのか。仕事はしておらんのかね」

「あ、はい」

「駄目じゃないか、こんな昼間からうろついていちゃ。私の話し相手になってくれるのはいいが、君は無給だろ。サボっているのと同じだよ」

「はい、そうなんです、何かお世話したくて」

「それより、君こそ世話が必要じゃないのかね」

「ああ、それは怖い話です」

「そうか、怖いか」

「考えたくありません」

「まあ、いい、だから、こんなことしないで、働きに出なさい。人のことなど考えず、しっかり収入を得んと、将来苦しいぞ」

「いえ、まだ青春ですから」

「まあ、そういうのは昔から変わっておらんようだなあ」

「はい、青春時代は迷い道ですから」

「青春の迷い道か。ああ、懐かしい」

了

